

4 発掘調査概要

(1) 調査経過

キトラ古墳では、これまでに主に以下に示す7回の調査を実施している。

- A. 平成9年度(1997)：墳丘北側および東側の発掘調査。墳丘規模・形状確認のための調査。
- B. 平成10年度(2002)：石室前面墓道部、墳丘盗掘坑、墳丘西南部の発掘調査。
- C. 平成11年度(2003)：石室南壁までの墓道部、石室盗掘坑の発掘調査
- D. 平成12年度(2004)：石室内部の発掘調査
- E. 平成23年度(2011)：石室内部の考古学的調査(発掘は実施せず)
- F. 平成24年度(2012)：石室内部および石室盗掘坑周囲の考古学的調査(発掘は実施せず)
- G. 平成25年度(2013)：墓道部の考古学的調査(発掘は実施せず)

Aは明日香村教育委員会が、B～Dは奈良文化財研究所、橿原考古学研究所、明日香村教育委員会が共同で、E～Gは奈良文化財研究所がそれぞれ調査を担当した。この他、ファイバースコープおよび小型デジタルカメラによる石室内部の調査を昭和58年度(1983)、平成10年度(1998)、平成13年度(2001)に行っている。調査により明らかになったキトラ古墳の特徴を以下に示す。

(2) 古墳の構造

キトラ古墳は、東西にのびる丘陵の南斜面を削り出して版築で造成した山寄式の古墳である。古墳の形状は二段築成の円墳で、平成9年度調査で検出した上段部および下段部の裾位置から、規模は下段直径13.8m、上段直径9.4mに復元できる。高松塚古墳と同様の墳形であるが、高松塚古墳は下段直径23mで、キトラ古墳のほうが一回り小さい。キトラ古墳の墳丘下段は全周せずに丘陵斜面に取り付く。テラス面は北側で背面の地山切断面にぶつかり、幅が狭くなる。

墓道の規模は、幅約2.35m～2.65m、推定全長5mである。石室に接する1.8mの部分は平坦であるが、それより南は傾斜している。側壁の高さは石室南端で3mあり、石室天井石の上にさらに約2m盛り土されている。

石室は、床4石、北壁2石、東壁4石、西壁3石、天井4石、南壁(閉塞石)1石の計18石から構築されている。石室規模は内法で、奥行2.40m、幅1.04m、高さ1.24mである。石室内は床面も含めて全て漆喰塗りで仕上げられ、壁と天井の漆喰面に壁画が描かれる。また、確認できる全ての石材の合わせ目にも漆喰が塗り込まれており、特に閉塞石と床石の合わせ目には多量の漆喰が三角形の断面形状で塗られている。

(3) 古墳の構築過程

キトラ古墳の発掘調査成果および、同様の造り方をしていると考えられる高松塚古墳の調査成果などからキトラ古墳の築造過程を復元する。先述したように、キトラ古墳では東西に延びる丘陵の南側斜面を削り出して、まず基礎造成が行われている。墳丘の発掘調査では、墳丘部分の地山を下段裾にそっ

て 10cm 程掘下げている状況が確認できることから、基礎造成時に墳丘予定地を約 10cm 掘り下げ、墳丘の規模と位置を確定したと考えられる。また、この段階で排水用の礫詰め暗渠が設けられる。暗渠は下段墳丘の下部に位置し、地山から掘り込んだ幅 40cm、深さ 70cm の溝で、内部に径 4～10cm 程度の礫を充填している。基礎造成の版築と一連の仕事として設置されたものと推定される。



Fig. 6 平成 10 年度発掘調査時の墳丘

その後、周辺を平坦にするため版築を行い、整地面が構築される。この整地面にまず床石が配置され、次に床面の高さまで周囲を版築で盛土する。その後、床石の四周に側石が設置され、側石上面まで版築で盛土がなされる。その後、天井石が設置され、石室を覆うように版築で墳丘がつくられる（一次墳丘）。

一次墳丘構築後に石室南側に墓道が掘削され、南壁石を取り外し、石室内部に壁画が描かれる。木棺や埋葬品が運び込まれた後、最終的に南壁石により石室が塞がれる。墓道床面には、南壁石を運ぶための丸太を敷設したコロレールの痕跡を確認している。コロレール痕跡は、約 50cm 間隔で 4 列に並ぶ素堀溝で、溝幅は 20cm 程度、深さは最大で 8cm 程度である。石室閉塞後にはレールを撤去し、溝を粘土により埋めている。また、石室南側では径 10cm 程度の柱が立てられた柱穴を確認した。コロレール痕跡との重複関係から、石室を閉塞し、レールを取り外した後に穴を掘り、柱を立てていたことが判明している。この柱穴は、墓道を埋める直前の埋葬儀礼に関わるものである可能性が考えられる。

墓道は版築によって埋め戻され、床面から 0.5～0.6 m の厚さにある埋土下部が特に強く叩きしめられている。墓道の埋め戻しに続き、墳丘全体が版築により盛土され（二次墳丘）、最終的な二段の円墳の形状に整えられる。なお、上段墳丘土の裾で版築時に使用した厚さ 4～5cm の幕板と径 10cm ほどの杭の痕跡を確認している。上段版築を行うにあたって幕板で多角形に囲い、その内側を版築していたと考えられる。

（４） 石室の特徴

石室は二上山産の凝灰岩の切石によって組まれている。ほぼ同じ構造をもつ石室として、高松塚古墳、マルコ山古墳、石のカラト古墳がある。石室は 4 つの床石を横長に並べ、その上に四方の側石を立て並べ、それらの側石に天井石 4 石を架ける構造となっている。床石の周囲は 3cm ほど低く削りとられ、その部分に四方の側石が置かれている。

天井石には深さ約 10cm の屋根形の線形がある。南壁以外の石材の側面には相欠き状の加工があり、石どうしが組み合うように意図されている。相欠きの方向は側石では北小口で外側が突出するため、北から順に側石を設置したと推定できる。天井石では下部が突出するため、南から順に置かれたことがわかる。天井石の正面側（墓道側）には、石室を屋根形に見せるために、上端および両端に面取りが施さ

れている。

南壁石の南面下辺西寄りでは、梃子穴が確認できた。高松塚古墳の調査成果を勘案すると、南壁石の開閉の際に使用されたと考えられる。最も南の天井石の東辺には、前面から 15cm ほどの位置に不整形形の穴を確認しており、これも梃子穴の可能性が極めて高い。西辺は盗掘により一部が破壊されているが、対称の位置に穴の痕跡を確認している。

石室内部では、朱線を総数 117 ヶ所、24 本分確認している。朱線の大半は石材の外周縁で確認し、石材を加工するための基準線として使われていたと考えられる。(前川歩)

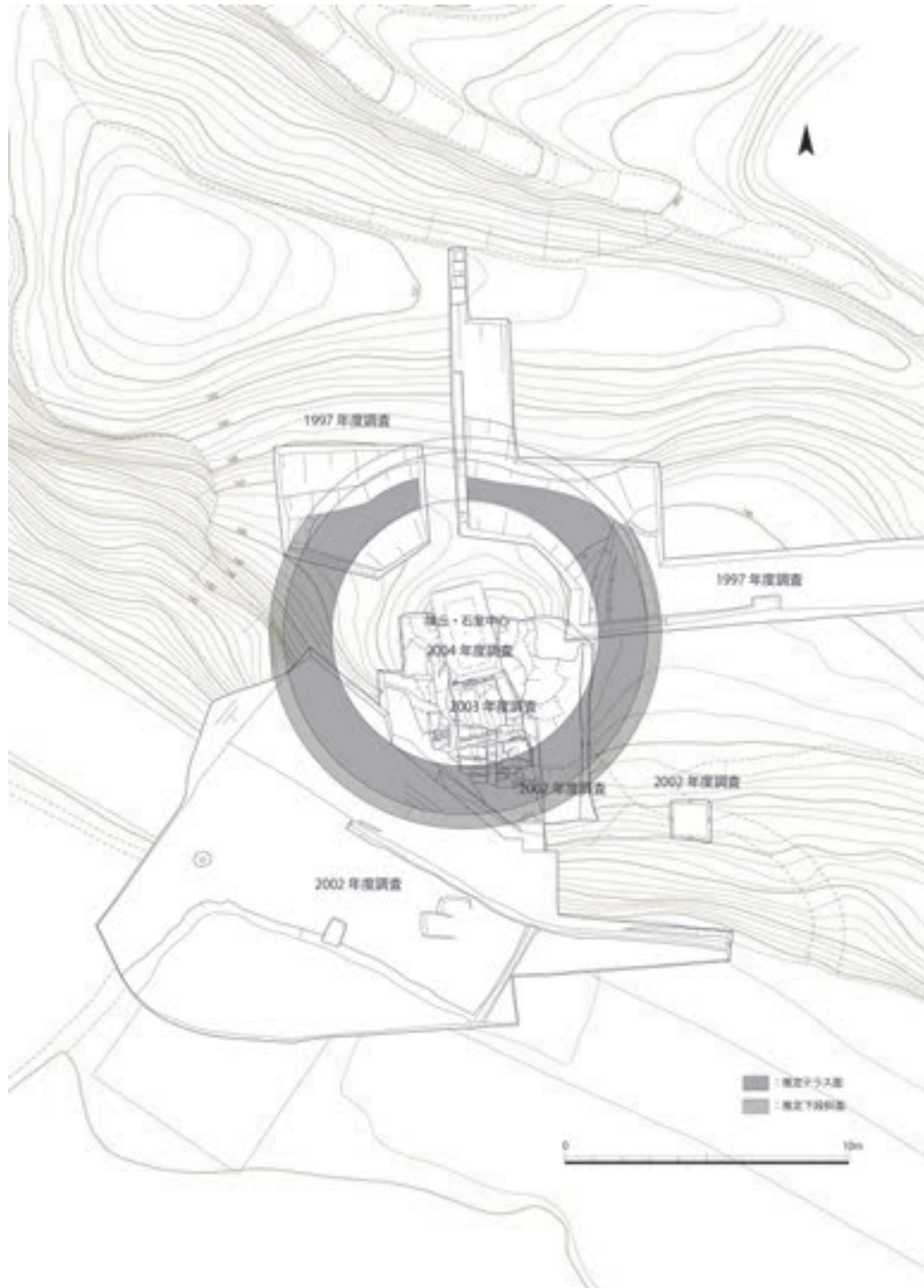


Fig. 7 調査位置図